

〈小市民〉シリーズにおける 「成長」の描かれ方

安達 愛

はじめに

ミステリ作家の米澤穂信は、2007年に行われた笠井潔との対談の中で、デビュー作からずっと書きたかったことは「思春期の全能感」についてであり、「全能感が試練にあって崩れ去るなり正しい自負に変わるなりする過程を描いてきた」¹と述べている。処女作『氷菓』は2001年に角川スニーカー文庫から刊行されるが、この作品の主人公である折木奉太郎は、省エネ主義を掲げる高校生で、彼は廃部寸前の「古典部」に入部し、好奇心旺盛な千反田えるをはじめとする古典部の部員たちとともに、様々な「日常の謎」を解き明かしていく。この作品はシリーズ化され、現在6冊刊行されている²。

米澤はこれまでに、上記〈古典部〉シリーズの他、ユーゴスラヴィアから来日した少女をめぐるミステリ『さよなら妖精』（東京創元社、2004）、人間関係にトラウマを抱える2人の高校生が「小市民」を目指す〈小市民〉シリーズ（創元推理文庫、2004-）、恋人を亡くした高校生が並行世界へ迷い込むSFミステリ『ボトルネック』（新潮社、2006）、高校2年の図書委員2名の活躍を描く〈図書委員〉シリーズ（集英社、2018-）と、まさに思春期の渦中にある高校生を主人公にした作品を数多く上梓している。

米澤は、2005年に笠井潔・北山猛邦・辻村深月と行った座談会の中で、自身の小説について次のように発言している。

やっぱりフラットな状態であるところの主人公が、探偵であるという役割を与えられ、それに対してまだ自分の実力が追いついていないわけですが、話を追うにしたがってその役割に対する自覚と実力を獲得していくというビルディングス・ロマンママみたいなものもエンターテインメントとしてやっていきたいですね。

（「座談会 現代本格の行方：二一世紀を担う新進作家たちの世界」『探偵小説と記号の人物：ミネルヴァの梟は黄昏に飛びたつか？』東京創元社、2006、pp.306-307）

先にとり上げた笠井との対談の中では、この座談会で「ビルドゥングス・ロマン」という言葉を用いたのは言い過ぎだったと訂正しているが、「成長物語」を書きたいという自身の考えの真意を次のように述べる。自身の世代も含めた現代の若者は、自分には一体何ができるのかというスキルへの懐疑は持っているが、このスキルへの懐疑を無視してしまうと、自分は大物だという全能感に走ってしまい、いずれ自分が何者でもないことに気づくことになる。この全能感をトライアルすることで、「自分のスキルの限界を見極める過程をミステリでやりたかった」として、「この全能感と裏返しの無能感、これを試練にかけることで自分を客観視することのできる視点を獲得する、そこまでの物語として〈古典部〉シリーズと〈小市民〉シリーズは考えています。」³と発言している。この全能感のトライアルと「自分を客観視することのできる視点」の獲得こそが、米澤が目指す「ビルドゥング（成長）」なのである。

〈小市民〉シリーズは、「全能感のトライアル」によって挫折を経験した主人公が、「探偵」であることを手放したところから物語が始まる。この作品には、互恵関係を結んだ2人の高校生が登場する。彼らは中学時代に自身の「全能感」が打ち碎かれることによって、高校では「小市民」に徹することで平穏な日常を手にとろうと誓う。

本稿では、この2人の高校生のうち「探偵」役となる小鳩常悟朗に焦点を当て、「思春期の全能感」がどのように試練を克服していくのか、そして青春ミステリという手法を用いながら、作中でどのように成長が描かれているのかを明らかにすることを目的としている。

1. 〈小市民〉シリーズとは

1-1. シリーズの概要

〈小市民〉シリーズの第1作目にあたる『春期限定いちごタルト事件』は、2004年に東京創元社の創元推理文庫から文庫書き下ろし作品として刊行された。

中学時代の苦い経験から人間関係にトラウマを抱える高校生、小鳩常悟朗と小佐内ゆきは、日々の平穏と安定のために「小市民」を標榜し、その実現のために互恵関係を結んでいる。高校入学を機に、「完全なる小市民への飛躍」を目指すも、2人の前には次々と「謎」が現われ、慎ましく生きたいという彼らの願いとは裏腹に、謎にかかわっていくことになる。

第1作は、合格発表を経て高校に入学してから高校1年の夏休み直前までの様子が描かれており、入学早々から同期生のポシュッと盗難事件にかかわったり、ずぼらな友人がどのようにシンクを濡らさずに「おいしいココア」を作ったのかを見破ったりと、事件の大小に程度の差はあれ、日常の中で起こる謎を解明する連作短編の形式をとっている。しかし最終話ではそれ

までの話の中で張りめぐらされた伏線が回収され、重大な犯罪事件へとつながる。2人は結果的に不正免許による詐欺を未然に防ぐことになったが、全国紙に掲載された犯人逮捕の記事を見て、「小市民」にそぐわない大それた行動をとったことを自省するのである。

第2作『夏期限定トロピカルパフェ事件』（2006）では、高校2年に進学した常悟朗とゆきの夏休みの出来事が描かれる。こちらは文庫書き下ろし作品と、雑誌『ミステリーズ!』（東京創元社）に掲載された作品が併録されている。夏休みの間、常悟朗はゆきの頼みで一緒にスイーツ店をめぐることになるが、この行動にはゆきのある企みが隠されていた。日常に潜む謎を解き明かす連作短編の形式は前作と同様だが、最後は警察も巻き込む誘拐事件が発生し、この事件によって常悟朗とゆきの互恵関係には決定的な亀裂が生じ、2人はその関係を解消することとなる。

そして文庫書き下ろしとして刊行された第3作の『秋期限定栗きんとん事件』（2009）では、2人の関係が解消された直後の高校2年の9月から、常悟朗とゆきが再び一緒にいることを選択する高校3年の9月までの様子がシリーズ初の上下巻で綴られる。これまでの2作は常悟朗の視点で物語が展開していたが、3作目では新聞部員の瓜野高彦と常悟朗、2人の一人称で描かれている。本作でゆきは1学年後輩の瓜野と付き合い始め、常悟朗にも新たなパートナーができる。彼らの新しい人間関係を描きながら、市内で発生している連続放火事件を追うことが本編の柱となっている。

以上の、春期から秋期までの3作品以外に、連作短編集『巴里マカロンの謎』（2020）が出版されている。こちらの短編集は2016～2019年に『ミステリーズ!』で発表された3編に書き下ろしの1編を加えたもので、まだ常悟朗とゆきが互恵関係を解消する前の、高校1年の9月から1月までの出来事が描かれている。

現時点で刊行されている〈小市民〉シリーズは以上であるが、そのほか雑誌に掲載され文庫未収録の短編が3作存在する。

1-2. 主要登場人物の特徴

〈小市民〉シリーズには主人公が2人存在する。

まず1人目は、物語の語り手でもある小鳩常悟朗である。常悟朗はかつて謎を解くことを好み、その推理力によって幼少の頃から他者に先んじてことの真相を見抜いてきた。しかし、中学時代に「調子に乗った知恵働き」をしたことによって周囲から反感を買い、人間関係に支障をきたすことになる。その結果、彼は自身の持つ探偵能力を封印し、高校では「小市民」に徹しようと心に誓う。しかし、卓越した観察力と考察力を持つ彼は日常の中に潜む多くの「謎」にかかわることとなり、結果として解きたがりの性分を抑えきれず、探偵の本領を發揮してし

まうのである。

2人目の主人公は常悟朗と同学年の小佐内ゆきである。常悟朗に「体が小さいことを除けば、外見的に目立つところはなにもない」⁴と形容されるゆきは、人見知りで、目立たぬよう地味に慎ましく日々を送り、甘いものをこよなく愛している。しかし中学時代までの彼女は、自分に危害を加える相手を完膚なきまでに叩き伏せることに至上の喜びを感じており、その性格が災いし、常悟朗と同じく「小市民」を志すことになる。しかしその目標を掲げながらも、しばしば自身の執念深い性向が顔を覗かせ、復讐を実行してしまう。また、行動力と直観力では常悟朗に引けをとらず、「シャルロットだけはほくのもの」⁵では、常悟朗が仕掛けた知恵試しを見事解き明かして彼に勝利している。

作中では、常悟朗の小賢しきは「狐」に、ゆきの執念深さは「狼」に例えられる。2人はお互いの悪癖を抑えて穏やかに過ごすため、互恵関係を結んで厄介事からお互いの身を守り合い、それぞれが心に誓ったことを破らないように相互に見張り合う約束をしている。

2人の本性を知っているのは、常悟朗の小学校時代の同級生である堂島健吾だけである。健吾は膂力と義侠心が売りで性格に裏表がない。高校で再会した常悟朗が「小市民」の仮面をかぶっていることに不快感を示し、以前の常悟朗を「嫌いじゃなかった」と評価している。常悟朗とゆきが事件に巻き込まれると、常悟朗から助けを求められることが多く、陰の立役者となっている。

2. 「探偵」の役割

2-1. 作品における「探偵」の描かれ方

本シリーズにおいて、米澤のいう「思春期の全能感」は常悟朗の「探偵」とゆきの「復讐者」としてのスキルに収束される。そこでまずは、常悟朗の「探偵」という役割が、作品ではどのように描かれているかを確認する。

『春期限定いちごタルト事件』は、常悟朗が見ている夢の場面から幕をあける。夢では常悟朗が衆人環視の中で級友を告発している。朗々と謎解きを行い、観衆からの賛辞を浴びて得意満面になっている常悟朗に向かって、その中の1人が次のせりふを放つ。

「本当にお見事。鮮やかな推理。綺麗な証明。でも、その、まあ、なんていうか、言いつらいんだけど、はっきり言わせてもらうとさ。／きみ、ちょっと鬱陶^{うっとう}しいんだよね」

(『春期限定いちごタルト事件』 p.11)

これは夢の話なので、現実には言われたことではない。しかし常悟朗はそのせりふを放った人物について「心当たりは何人かいる。ほくにそういうことを言ってくれそうな相手は。」⁶と述べており、実在の人物や実際の出来事が反映された夢であると想像される。そして常悟朗は夢の中で、「調子に乗っているほくを、夢を見ている主体であるほくはひどく苦々しい気持ちで見ている。」⁷と当時の自分を客観的に捉え、怒りの矛先を自分を中傷する相手に向けるのではなく、自分自身に相手をイラつかせる原因があったのだと反省する。

常悟朗が「狐」だったころを知る健吾は、当時の彼を思い出し次のように語る。

「……わかっていることは、全部口に出さないと気が済まなかった。自分の知らないことを他人が知っていれば、憎まれ口になんか負け惜しみ、だ。／だがな、いまのお前はまだタチが悪い。ちょっと話ただけじゃ丸くなったように見えるけどな。口と性格の悪いガキが、顔は笑っても腹に一物ありそうな嫌な野郎になっちゃった」

(『春期限定いちごタルト事件』 p.127)

「お前の口から『そうだね』とか『その通りだ』とか出てくるのを聞くと、苛立つんだよ。本当にそうだなんで、思ってもいないくせに。『はい』の一言で良しとしたことのなかった男が」

(同上、p.128)

歯に衣着せぬ物言いだ、以前の常悟朗が負けず嫌いで、自尊心の高い人間だったことが窺える。

名探偵の人間性を理解するために、新保博久が世界初の推理小説「モルグ街の殺人」⁸に登場する素人探偵C・オーギュスト・デュパンについて評した文章を紹介する。

デュパンはミステリー史上、最も重要な探偵と目されるが、デュパン自身はそれほど魅力的な人物とはいえないだろう。／人間嫌いで、一般人の平凡な知性を軽侮し、警察の根気強いばかりの捜査を嘲弄する。これらの性格は、シャーロック・ホームズをはじめ、後代の紙上探偵に多かれ少なかれ継承されたものだが、デュパンにはそれを読者に共感させるための装置に欠けていた。

(「名探偵の魅力」『私が愛した名探偵』新保博久編著、朝日新聞社、2001、pp.277-278)

世界で最初に創造された名探偵も、愛すべき性格の持ち主ではなかったということである。風変わりな傑出した探偵能力を持つデュパンは、自分を特別な存在だと認識し、平凡さや根気

強さを取柄とする市井の人々を見下していたようである。その性格の一端は、常悟朗にも垣間見ることができる。

中学時代の常悟朗は、恵まれた探偵の才能を持ちながら、周りの生徒からはそれを「鬱陶しい」と煙たがられることになった。嫌な思いをするくらいなら、と知恵働きをやめて「小市民」に徹しようとするのだが、高校に入学してからも「狐」時代を知る健吾から知恵を貸すよう頼まれることがある。例えば「For your eyes only」⁹で、美術部にある2枚の絵の謎解きを依頼されるが、「目の前で探偵めいた真似をされるのは決して気持ちのいいものではない」¹⁰と知っている常悟朗は、中学時代とは違い気を配りながら推理を披露する。しかしそれでも事件の真相を知った依頼者が見せるのは不快感と冷たい笑みなのである。

〈小市民〉シリーズでは、謎の真相に辿り着くことが必ずしも望ましい結末につながるわけではない作品も多い。結果的に、真実を知らない方がよかったのではないかと思うような場面も出てくる。それでも常悟朗は謎を前にして「探偵」であることをやめることができない。本格ミステリには探偵の存在は不可欠であるが、「小市民」を中心とする世界においてはその存在は異端でしかなく、「鬱陶しい」と煙たがられてしまうのである。

2-2. 「探偵」をとりまく「空気」

波多野健はクローズドサークル内で起こるデス・ゲームを描いた米澤の『インシテミル』（文藝春秋、2007）をとり上げ、本格原理主義に基づいた物語世界にあってもミステリの約束事が自明のものではなく、それに精通している人間としていない人間には断絶があることを指摘している。

これは、言葉が通じない異邦人集団のなかで生きて行くしかない少数派、さしずめ流刑された貴種流離譚の主人公の心境である。米澤は、こうしたルール意識を規範として共有している貴種たちを「空気の読めないミステリ読み」と呼ぶ。暗鬼館の中でさえ、ルールブックの言葉が通じ合うのは貴種たちの間だけであり、世界を貴種の原理＝本格原理主義で解釈するのではなく、貴種とは所詮世界の中で余計者であるという醒めた意識、つまり、本格を外から眺めている米澤の眼がここにある。

（「『空気の読めないミステリ読み』と『信用できない語り手』の問題」『ニアミステリのすすめ：新世紀の多角的読書ナビゲーション』探偵小説研究会編著、原書房、2008、p.60）

波多野が述べる「異邦人集団」は〈小市民〉シリーズにおいては「小市民」がこれに該当する。そして常悟朗やゆきのような存在は、異邦人集団の中に投げ込まれた貴種であり余計者と

ということになる。米澤は、本格原理主義の世界にいるはずの「探偵」を、余計者（貴種）として描くことにより、「全能感と裏返しは無能感」を試練にかけることを試みているのである。

ところで波多野の論の中に「空気の読めないミステリ読み」という言葉が出てくるが、「空気」とはどのようなものだろうか。山本七平は「空気」とは次のようなものであると述べる。

それは非常に強固でほぼ絶対的な支配力をもつ「判断の基準」であり、それに抵抗する者を異端として、「抗空気罪」で社会的に葬るほどの力をもつ超能力であることは明らかである。以上の諸例は、われわれが「空気」に順応して判断し決断しているのものであって、総合された客観情勢の論理的検討の下に判断を下して決断しているのではないことを示している。だが通常この基準は口にされない。それは当然であり、論理の積み重ねで説明することができないから「空気」と呼ばれているのだから。従ってわれわれは常に、論理的判断の基準と、空気の判断の基準という、一種の二重基準のもとに生きているわけである。そしてわれわれが通常口にするのは論理的判断の基準だが、本当の決断の基本となっているのは、「空気が許さない」という空気の判断の基準である。

（『「空気」の研究』文春文庫、1983、p.22）

山本は、『文藝春秋』53巻8号（文藝春秋、1975.8）に掲載された戦艦大和に関する記事での、軍令部次長・小沢治三郎中将の「全般の空気よりして、当時も今日も（大和の）特攻攻撃は当然と思う」（括弧内山本）という発言に驚いたと述べる¹¹。大和の出撃を決定したのは海や船、米軍の実力まで知り尽くしていた専門家集団であったにもかかわらず、最終的な判断は客観的なデータに基づくものではなくその場の空気によって決定されていたのだ。

戦時中、すでに日本に存在した「空気」という名の非合理的で曖昧な判断基準は、現在の「小市民」の世界においても充満しているように感じる。そして、「空気」の非合理性と対立するのがミステリにおける合理性ではないだろうか。米澤はミステリを読む楽しみについて次のように述べている。

まずは、知と理の文芸であるというところがたまらない魅力です。皆様も先刻ご承知のことと思いますが、この世はあまり理が勝つようには出来ていません。脳髓を絞って組み上げた精緻なことばは、時には情に流され、時には縁に丸め込まれ、あるいは単に声の大きさに掻き消されてしまう。腕力や財力の前に沈黙を強いられることもあるでしょう。それでも理屈を押し通そうとすれば「面倒なやつ」と眉をひそめられることは必至です。／しかしミステリは違う。ミステリは何よりも知と理の世界なのです。（中略）／かくして犯人が明かされるや「屁理屈捏ねやがって」というあの強烈無比なる思考停止に黙殺され

ことなく、たとえ作中に於いて裁かれないとしても読者の心中に於いて、事件は解決するのです。私にとってミステリを愛するというのは、必ずしもトリックやロジックを愛することと同値ではありません。本質的には、それは知と理が優越する空間を愛することなのだろうと思うのです。

(『米澤屋書店』文藝春秋、2021、pp.78-79)

米澤が述べる通り「知と理の文芸」であるミステリにおいては、「空気」などという非論理的な判断基準はまかり通らない。割り切れない世の中をどこまでも割り切って論理的に真相に辿り着くのがミステリの世界であり、その役割を担うのが探偵なのである。探偵による事件の解決は、非合理性を排除し論理的に進められる。「探偵」とは、「探偵」という役割を担う限り「空気」を読まないことを認められた存在であるといえる。

つまり、常悟朗は彼自身が「探偵」であることを選択する以上は「空気」を読んではいけないのである。しかし実際に彼が生活するのは「空気」こそが判断の基準となっている「小市民」の世界なのである。自己の探偵性が周囲との軋轢を生み、その結果自尊心を砕かれた常悟朗は、「小市民」に擬態し「空気」に支配された世界で生きることを選択する。

しかし彼が本当に存在しているのは本格原理主義（ミステリ）の世界であり、そのため常悟朗は幾度も2つの世界の狭間で揺さぶられて試練を受けることになるのである。

3. 「小市民」をとりまく世界

前章では、〈小市民〉シリーズにおける「探偵」の役割を確認した。そして探偵がもつ合理的判断基準と対立する判断基準として空気の判断基準があり、常悟朗とゆきが標榜する「小市民」はこの「空気」によって支配されていることを明らかにした。

本章では、具体的に彼らが目指す「小市民」とは何なのかを確認する。

3-1. 作品における「小市民」とは

具体的には明かされていないが、常悟朗とゆきは中学時代に何らかの試練によって「思春期の全能感」が打ち碎かれる経験をしている。挫折を味わった2人は「小市民」として生きることを誓うのだが、そもそも彼らが目標とする「小市民」とはどのような人々を指すのか。

『三省堂国語辞典 第八版』（三省堂、2022）によれば、「小市民」とは「①中産階級。プチブル。②名もなくなりたいした財産もなく、都市の中で静かに暮らす人。」を指す言葉である。辞

典には2通りの意味が掲載されているが、常悟朗とゆきは後者の意味でこの言葉を使用していると考えられる¹²。

では具体的に、作中ではどのようにこの言葉が用いられているだろうか。『春期限定いちごタルト事件』から、「小市民」について書かれている部分を一部抜き出してみる。

日々の平穏と安定のため、ほくと小佐内さんは断固として小市民なのだ。もっとも、その表れ方はちょっと違う。小佐内さんは隠れる。ほくは、笑って誤魔化す。(p.18)

小市民たるもの、テレビは見るもの、新聞は読むものだ。出演したり掲載されたりはもってのほか。使われるかどうか怪しいインタビューにだって、答えるつもりは全然ない。ただ、人様の仕事の邪魔をして恨みを買うのも、これまた小市民的でないというのは問題だ。(p.18)

ほくは一生懸命、顔でも心でも愛想笑いを浮かべる小市民になろうとしているのに。(p.127)

理不尽を受け流すのは小市民心得の筆頭とっていい。(p.177)

諦念と儀礼的無関心を自分の中で育んで、そしていつか掴むんだ、あの小市民の星を。(p.243)

辞典には「静かに暮らす人」とあったが、作中では日々の平穏と安定のために人から恨みを買わないよう注意し、愛想笑いや理不尽を受け流すことを心得とし、諦念と儀礼的無関心を育むことを是としている。「小市民」にとって重要な課題は、いかに平穏に日々を過ごせるかなのである。そのためには、事件やトラブルといった衝突の種は徹底的に避けられ、常悟朗やゆきのような「探偵」や「復讐者」などの存在はやはり「小市民」から見ると異端で余計者なのである。

3-2. 「小市民」をとりまく人間関係

常悟朗とゆきの互惠関係はお互いが「小市民」になるためのもので、原則的には学校生活の中でのみ機能する。2人をとりまく人間関係は学校内に集約されているため、学校から一歩外に出てしまえば、2人が一緒にいる必要もなくなる。

学校内では常に「小市民」という仮面をかぶり、周囲から浮かないように細心の注意を払っている2人には、休みの日に誘い合うような気心の知れた友人はいない。中学時代のように彼らを嫌う人間がいない代わりに、腹を割って話せるような親友も作れないのである。

土井隆義は、若者たちの間に浸透している対立の回避を最優先にする人間関係を「優しい関係」と呼ぶ。従来親友とは、対立や葛藤を経験しながらも決別や和解を繰り返すことで徐々に揺るぎない関係を創り上げるものであったが、互いの対立点が表面化することを避ける現在の「優しい関係」の中では、友人関係の原理も変化していると指摘する。

現代の若者たちは、自分の対人レーダーがまちがいがなく作動しているかどうか、つねに確認しあいながら人間関係を営んでいる。周囲の人間と衝突することは、彼らにとってきわめて異常な事態であり、相手から反感を買わないようにつねに心がけることが、学校での日々を生き抜く知恵として強く要求されている。その様子は、大人たちの目には人間関係が希薄化していると映るかもしれないが、見方を変えれば、かつてよりもはるかに高度で繊細な気くばりを伴った人間関係を営んでいるともいえる。

(『友だち地獄：「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房、2008、pp.16-17)

このように現在の若者の間では、お互いが傷つけないために適度な距離を常に保持し続けることが生きる上での処世術となっている。衝突を避けることが重視され、傷つけ合うことを恐れるあまり、自分の本心をさらけ出すことが困難になる。土井は、「優しい関係」では、「互いの葛藤から生まれる違和感や、思惑のずれから生まれる怒りの感情を、関係のなかでストレートに表出することはままならない。むしろそれらを抑圧することこそが、「優しい関係」に課せられた最大の鉄則である。」¹³と述べるが、その違和感や怒りの感情エネルギーは、排出する場を失い自己の内部に溜め込まれていくことになると指摘する。

作中では互惠関係に基づき、復讐者(狼)の本性を覗かせるゆきに対して、常悟朗が理不尽を受け流すよう諭す場面が何度か出てくる。「怒り」は「小市民」にとっては対立をまねくものであり、平穏な日々を脅かす危険因子である。常悟朗とゆきが身を置く「小市民」の人間関係も、この「優しい関係」によって成立している。彼らは「知恵働き」や「復讐」という自身が持つ本性を押し隠すことによって、学校生活を波風立てることなく乗り切ろうとするのである。

土井は、若者の「優しい関係」を描いた作品として白岩玄の『野ブタ。をプロデュース』(河出書房新社、2004)を挙げている。この作品はクラスの人気者が、周囲から見下されているいじめられっ子の転校生を人気者にプロデュースしていくという物語で、互いの対立点を表面化させることを避ける若者たちの人間関係が描かれている。

この作品については、鈴木翔も「スクールカースト」を描いた文学として紹介している。「スクー

ルカースト」とは、小中高校生が、クラス内でお互いに「ランク」付けを行い、クラスメイト同士がそれぞれ自分の「ランク」に応じた行動をとることが暗黙の了解として認知されている関係性のことで、鈴木によると2007年に出版された森口朗の『いじめの構造』（新潮社）で初めて紙面でこの言葉が使用されたが、もともとはインターネット上で知られるようになったものだという¹⁴。

2000年代に入るとこの「スクールカースト」を主題とする文学やマンガが散見されるようになるが、大塚英志は鈴木が「スクールカースト」という制度を危惧しつつも容認していることに対して違和を表す。

学校という制度や教師に対する提言も、「上位」カーストの者への戒めいましもなく、ただ「下位」の者の耐え方を示しているにすぎない。（中略）これは全くの自己責任、自助努力でしかない。それが「現実」だとしても、「現実」の「容認」を社会学者や文学が求めることにほくは強い違和感を持つ。／そして若い世代は持たないだろう。

（『感情化する社会』太田出版、2016、p.94、傍点ママ）

大塚は、大江健三郎の「セヴンティーン」¹⁵に描かれているクラス内の階級に「スクールカースト」を重ねる。しかし「セヴンティーン」には階級をめぐる「闘争」があり、大江が「ヒエラルキーの最下層にいる存在が、ヒエラルキーや制度を懐疑し、反転しえる特別な立場にいるというひどく懐かしい「かつて」の革命思想」¹⁶を描き、「身体」のビルドゥングスを強烈なモチーフとしていると示したうえで、「スクールカースト」文学の代表作と目される浅井リョウ『桐島、部活やめるってよ』（集英社、2010）が、スクールカースト内のヒエラルキーを自明のものとしているがゆえに、この作品では「ビルドゥング」は成立しないと断言する¹⁷。

闘争と革命を描く「セヴンティーン」と、対立や葛藤を避ける『桐島、部活やめるってよ』や『野ブタ。をプロデュース』の間には深い断絶がある。前章で「小市民」は、非合理的な「空気」による判断基準によって支配されていると指摘したが、〈小市民〉シリーズも学校内の人間関係と登場人物の心性の描き方は、まさに「優しい関係」や「スクールカースト」といった周囲の「空気」を読むことで成立する作品と共通する部分があるといえる。

大塚は、現状の制度を疑うこともなく、対立や葛藤を避けることを自明のこととして受け入れるこれらの作品には、「ビルドゥング」は成立しないと述べていたが、米澤が作品の中で目指しているのはまさにこの「ビルドゥング」である。大塚の意見を換言すれば「ビルドゥング」が成立するためには、対立や葛藤は避けては通れない問題だということだ。米澤はこの問題を作中でどのように解決しているのだろうか。

4. 〈小市民〉シリーズにおける「成長」の描かれ方

4-1. 作品にみられる対立と葛藤

〈小市民〉シリーズにおける葛藤は、基本的には「小市民」になろうという目標を自己の「探偵」という性向が邪魔をすることに対して向けられる。その葛藤が向かう先は、自分という存在を受け入れてくれない世界に対してではなく、常に自分の内面に対してである。

しかしその葛藤はあまり深刻なものとは思われない。中学時代の常悟朗は確かに「探偵」であることを手放すほどの痛手を受けたようだが、高校生になった彼はむしろいきいきと知恵働きに勤しんでいるようにも見受けられるからだ。ゆきが誘拐事件に巻き込まれた時でさえ、常悟朗はゆきを心配する気持ちよりも、「こんなおいしい材料は他にない」と思って高揚してしまい、あまつさえ誘拐事件を「素晴らしい事件」と呼んだり「誘拐万歳！」と喜んだりしてしまう¹⁸。そういう自分の性格が周囲の人間から反感を買い、それが嫌で「小市民」を標榜したにもかかわらず、本質的には何も変わっていないことがわかる。

一方、〈小市民〉シリーズに描かれる対立は、大きく分けて2つ挙げられる。

1つ目はすでに検討を行った「探偵」対「小市民」の構造である。この対立が顕在化するのは中学時代であり、作中では過去のこととして描かれる。そして現在は「探偵」から「小市民」へと鞍替えをしており、1つ目の対立は消失したことになる。しかし、常悟朗は「小市民」に擬態しているだけで、実際には探偵の性向を捨てきれていない。そのため互恵関係を結んでいるゆきの協力を得て、両者の対立が起こることを回避している。

2つ目は、その互恵関係にあるゆきとの対立、つまり「探偵」対「復讐者」の構造である。中学時代に同様のトラウマを抱え、「小市民」という共通の目標を掲げる2人だが、犯罪を解明し防ぐ立場にある「探偵」に対し、「復讐者」は犯罪者側にもなり得る。それゆえ復讐者としての一線を越えた時、常悟朗はゆきを許すことはない。ゆきの誘拐事件が彼女によって仕組まれていたことを暴いた常悟朗は、ゆきを「嘘つき」と呼ぶ。それに対し、ゆきは次の言葉を返すのだ。

「そう。わたしは嘘つき。小鳩くんにも、堂島くんにも嘘をついた。小市民になるっていう約束も、思いっきり破っちゃった。／でもね、小鳩くんもやっぱり嘘つき。ねえ、小鳩くん、気づいてる？ いま、ずっとわたしを告発し続けた小鳩くんは、とっても楽しそうだったんだよ。考えをめぐらせて、どんな小さなことでも見逃すまいとしていた小鳩くんは、いきいきしてた。推理したくないなんて嘘よ。小鳩くんの『小市民』だって、嘘じゃない」

(『夏期限定トロピカルパフェ事件』 p.225)

互恵関係で結ばれた2人は、お互いの性格も思考も熟知しているため、相手の嘘を告発することで、自分の嘘も露見してしまうのである。学校だけでなく自宅でも嘘をつき続けていると話すゆきは、恐怖心から今回の事件を起こしたのだと打ち明けるが、常悟朗はそれを絶対に信じないだろうと告げる。なぜならば常悟朗もゆきも、考えることができるだけで、「共感すること」ができない人間だからだ。そして2人共、本当は賢い「狐」でも「狼」でもなく「小市民」になろうという目標も嘘でしかないのだとしたら、自分たちには何が残るのかわかるかと常悟朗に問いかける。

本当は『狐』なんかじゃないのに自分を『狐』であると思い込んで、そして『小市民』になると宣言したんだっつら。しかも、それすらも嘘なんだとしたら。／それはまるで、綿菓子^{ふく}のよう。甘い嘘を膨らませたのは、ほんの一つまみの砂糖。／何が残るか、もちろんわかるよ、小佐内さん。小佐内さんのくちびるが、ゆっくりと動く。／「残るのは、傲慢^{ごうまん}なだけの高校生が二人なんだわ……」

(『夏期限定トロピカルパフェ事件』 pp.227-228)

作中では、過剰なほど「小市民」という言葉が繰り返し使用されるが、彼らがそれを志向すればするほど、自分たちが「小市民」とは一線を引いた存在だと自認していることが強調されていく。彼らは「思春期の全能感」を叩きのめされてもなお、自分たちが特別な存在だという思いを捨てきれずにいる。しかし結局彼らは特別な人間ではなく、だからといって他の人たちのように「空気」を読んで「小市民」として生きることもできないただの「傲慢なだけの高校生」なのだとその事実を突きつけられる。

常悟朗とゆきは、再び試練を受けて、「思春期の全能感」を打ち碎かれる。彼らは「小市民」になることはできなかったのである。「小市民」ではない彼らは「空気」を読むこともできず、対立を避けられず葛藤を繰り返すことになるのだ。

4-2. 作品に描かれる「成長」とは

常悟朗とゆきは互恵関係を解消した後も「小市民」であろうとし続け、それぞれ新たなパートナーと付き合いはじめる。ゆきの彼氏となった新聞部の瓜野は恥ずかしげもなく「おれはただ、他の誰でもないこのおれが、どの『月報船戸』にも載ってない記事を書いたんだと言いたいんだ」と言い、さらに「どこかに、瓜野高彦は船戸高校にいましたと、そういう跡を残したい。」¹⁹と付け加える。まさに「思春期の全能感」に走った状態である。だが、ゆきは瓜野が

「小市民」以外の何者にもなれないことを見抜いており、彼と一緒にいることで自分も本物の「小市民」になれるたと願う。そのため、瓜野を助けたいと裏から手をまわして応援する。瓜野は市内で発生している連続放火事件の犯行を予想しそれを記事にする。それは徐々に他の生徒の耳目を集めるようになるが、結局瓜野は誤った推理によって真相に辿り着くことができず、ゆきとも一緒にいられなくなってしまった。

一方、常悟朗は「そこそこ綺麗な容姿で、ほどほどに青春を謳歌している」²⁰タイプの仲丸十希子から告白されて付き合うようになる。休日にはデートを重ねるものの、常悟朗は十希子の言動を糸口で推理で展開の先読みをしてしまい、相手に不審がられる結果となる。また、混雑するバスの中で十希子に席を確保するための知恵働きを行うが、そのことに彼女が気づくことはなく、座席に座れたのは単なる偶然だと思われぬ。常悟朗は「小市民」の殻をかぶっているため、自分の手柄だとは決して彼女には言えない。そして、何があっても自分の内面を曝け出さない常悟朗は、最終的に十希子から三行半を突きつけられる。

常悟朗とゆきは、自身が「小市民」になりきるために「小市民」と付き合うことを選択したが、どちらもうまくいかずに終わりを迎えてしまったのだ。

そして常悟朗は、ゆきが連続放火事件にかかわっているのではないかの疑惑から健吾の協力を得て捜査を進めるが、犯人を捕まえるための張り込み中に、健吾から「なあ常悟朗。俺は思うんだが、お前は結局、小市民じゃないんだよ」²¹と言われる。唯一常悟朗の小学校時代を知る健吾からのその言葉を、常悟朗は「なにをいまさら」と思いながら受け入れるのである。

斎藤環は、「世界の多重化」が米澤作品の重要なキーワードであると述べた上で、しかし多重世界という設定は成長の不可能性と結びつく指摘している。

セカイの多重性を知ってしまった主体は、もはや成長することはない。成長とは、葛藤やストレスを内面化していく過程でもある。しかし、それが可能になるためには、「固有(単一)の世界の固有(単独)の自分」に対する、揺るぎない信念が必要とされる。重大なストレス(震災のような)に見舞われた時、「それが起こらなかったセカイ」「リセット可能なセカイ」を信じようとすることは、不可逆的な成長を犠牲にして可逆的救済を選択することだ。それは言うまでもなく、トラウマの身振りにほかならない。／意識的かどうかは別として、米澤穂信は多重世界を描き続けてきた。そして多重世界を描く虚構は、キャラクターの成長をリアルに描くことはできない。それゆえ、ここから導かれる結論は、米澤穂信における「ビルドゥングス・ロマン」の不可能性、ということになる。すくなくとも論理的には。

(「距離と祈り、あるいは世界の多重化に関する覚え書き」『ユリイカ』39巻4号通巻533号、青土社、2007.4、pp.99-100)

しかし、「たとえ多重世界を前提とするにしても、セカイ間の乖離を徹底化し、ついには「もうひとつのセカイ」を断念することで、われわれは「成長」を選択しうる」²²可能性があることを言及する。この評論の時点ではまだ〈小市民〉シリーズは『夏期限定トロピカルパフェ事件』までしか刊行されていなかったためか、斎藤は本シリーズでの「多重世界」は他の作品ほど明白ではなく、「中学時代」がこれに近いのではないかと述べている。

しかし筆者は「小市民」の世界こそ、彼らにとっての多重世界なのではないかと考える。

どれだけ彼らが強く願っても決して交わることがない世界、それこそが彼らが標榜する場所なのである。なぜならば、「知と理の文芸」であるミステリは、合理的な判断基準の上に成り立っていないからである。

そして、斎藤が述べるように「もうひとつのセカイ」を断念することが「成長」につながるのだとすれば、常悟朗とゆきの成長は、「小市民」になると口にするをやめ、「狐」であり「狼」である自分を受け入れるところから始まる。

健吾から、「小市民じゃない」と言われた夜、常悟朗はゆきとおよそ1年ぶりに再会する。常悟朗はゆきと離れていた間に付き合っていた十希子について話す。「狐」の姿を見せる必要がない十希子とは気楽に付き合えるはずであった。しかし内心では次のように思っていたと言う。

……気づいてももらえないというのはどうだろう。ぼくは仲丸さんに、「いやちょっと待って。いまぼくは謎を解いたんだけど、それについて感想は？」と言いたい衝動を抱えていた。結局、口にはしなかったけれど、そのもどかしさは時間と共に積もっていく。／それでも、あのまま何もなければ、ぼくも慣れていったのかもしれない。どんな秘密をどれほど知恵を絞って解き明かしても、「あ、そうなんだ」だけで済まされてしまうことに慣れていけば、ぼくの虚栄心はいずれ疲労して^{まも}消耗して、ついには消えてしまったかもしれない。／あるいはそれも、いい結論だったのだろう。／しかしぼくの目の前には連続放火事件があった。一方で仲丸さんは仲丸さんで、ぼくへの不満を募らせていった。仲丸さんの人生観に照らせば、ぼくは嫉妬に狂わなければならなかったのだ。全部が無理だった。

(『秋期限定栗きんとん事件 下』 p.209)

常悟朗は、十希子と付き合うことによって、自分は謎を前にして「小市民」になることはできないのだと悟る。そして「探偵」という本性に誰一人気がつかず、それを受け入れてもらえないことへの葛藤を抱えていたのだ。そして「小市民」である十希子とのデートよりも、「狼」のゆきと対峙して「解決篇」の会話をしている方が、「体温が上がる」²³のだとゆきに伝え、こう続ける。

「小市民」とは、まわりと折り合いをつけるためのスローガン。もう二度と孤立しないための建前。ほくは使い物になりませんから放っておいてください、という白旗。／そんなスローガンを三年も掲げ続けて、ようやくわかった。本当に折り合いをつけたいなら、最後の瞬間にぐっと我を殺すためには、そんなものは必要ない。ほくが白旗を振れば振るほど、内心との乖離がいやみになる。心の中で相手を馬鹿にする気持ちが、積もって腐る。／そうじゃない。必要なのは、「小市民」の着ぐるみじゃない。／たったひとり、わかってくれるひとがそばにいれば充分なのだ、と。

(『秋期限定栗きんとん事件 下』 p.212)

「小市民」の中に身を隠して生きて行くことで、いつかは本物の「小市民」になれると願っていた2人だったが、結局彼らに突きつけられたのは「小市民にはなれない」という現実であった。繰り返しになるが、「知と理の文芸」であるミステリは合理的な判断基準の上に成り立たねばならず、非合理を排した先に真相を見出す「探偵」と、合理性に欠けた「空気」という判断基準に支配された「小市民」の世界は本来交錯するはずがなかったのだ。それを理解し、「小市民」になるという目標を断念することで、ゆきという真の理解者を手に入れた常悟朗は、「小市民」にならなくとも孤立を恐れる必要がなくなったのである。

そして今回、彼は市内で発生した連続放火事件を解決した。この事件は、市内に自警団ができたり警察が見回りを強化したりと、学内だけでなく世間の関心を集めていた。そのような事件を解決に導いたことによって、彼は「探偵」としての自信をとり戻し、ありのままの自分の姿でも社会との接点を見出すことを可能にした。

常悟朗は、ゆきから教えられた栗きんとんの作り方を自分たちの状況に例え、「そのままではえぐい自称小市民を、誰からも疎まれないようにする方法論」が分かったとして、「ほくたちは煮られて潰されないと、ちゃんとアクが抜けないのだろう。何度も叩き潰されたはずなのに、どうやら裏ごしが足りなかったらしい。」²⁴と語る。

常悟朗とゆきは甘い栗きんとんが仕上がるように、ようやく自分たちのあるべき姿に辿り着くことができたのだ。

おわりに

本稿の目的は、〈小市民〉シリーズにおいて、「探偵」が抱いている「思春期の全能感」がどのように試練を克服していくのか、そしてどのように成長が描かれているのかを考察すること

であった。

まずは作中において「探偵」がどのように描かれているかを確認した。「探偵」は「小市民」から異端者として疎ましがられるが、その背景には「小市民」の世界を覆う「空気」の存在があることを指摘した。ミステリは、論理的に真相に辿り着く文学であり、その役割を担うのが「探偵」である。「探偵」による事件の解決は、非合理性を排除し合理的に行われるため、「空気」を読むことが重視される「小市民」の世界とは相いれない。そのため、「探偵」である常悟朗は、本格原理主義（ミステリ）の世界と「小市民」の世界の狭間で揺さぶられる存在であることが分かった。

次に「小市民」をとりまく環境についてさらに詳しく検討した。常に「空気」を読むことが求められる「小市民」の世界は、若者の間に浸透している「優しい関係」や「スクールカースト」と呼ばれる学校内のヒエラルキーと共通している部分があることが分かった。

しかし常悟朗たちは「小市民」を標榜してはいるが、実際には「小市民」ではないため、「優しい関係」や「スクールカースト」を描く文学とは異なり、対立を避けられず葛藤を繰り返してしまうことを指摘した。

〈小市民〉シリーズでは、「思春期の全能感」が幾度もトライアルされ、主人公は「狐」にも「小市民」にもなり切れずに、己の「無能感」を味わうことになる。斎藤環は、米澤作品にとって重要なキーワードとして「世界の多重化」を挙げているが、「小市民」の世界はまさに彼らにとっての多重世界であり、ミステリが「知と理の文芸」である以上、2つの世界は交わることがない。その事実気づき、「探偵」である自分を受け入れることで、彼には「成長」の機会が与えられる。常悟朗は自分自身の内面と向き合い、連続放火事件を解決することで社会とつながり、自分の内面を理解してくれる相手を見つけることができた。

しかし、本シリーズはまだ完結したわけではない。彼らにはまだいくらかの高校生活が残されている。今後、彼らがどう成長していくのか、最後まで見届けたい。

文末脚注

- 1 「ミステリという方舟の向かう先：「第四の波」を待ちながら」『ユリイカ』39巻4号通巻533号、青土社、2007.4、p.77
- 2 〈古典部〉シリーズは2作目までは角川スニーカー文庫内のミステリレーベル「スニーカー・ミステリ倶楽部」から刊行されたが、レーベルの廃止に伴い3作目以降は単行本として刊行された後に角川文庫に収録されるようになった。それに伴い1、2作目も現在は角川文庫より出版されている。
- 3 注1に同じ。p.85

- 4 『春期限定いちごタルト事件』 創元推理文庫、2004、p.16
- 5 『夏期限定トロピカルパフェ事件』（創元推理文庫、2006）収録。
- 6 注4に同じ。p.11
- 7 同上。pp.10-11
- 8 Poe, Edgar Allan. *The Murders in the Rue Morgue*. 1841.
- 9 『春期限定いちごタルト事件』収録。
- 10 注4に同じ。p.104
- 11 『「空気」の研究』文春文庫、1983、pp.15-16
- 12 作中で、一度だけ「プチ・ブル」という意味で「小市民」という言葉が使用される場面がある。自転車を盗んだ犯人に復讐を目論むゆきを止めようとする常悟朗に対し、ゆきが「小市民にとって、一番大切なものって、小嶋くんはなんだと思う」と質問する。常悟朗は「現状に満足すること」と答えるが、それに対しゆきは「小市民にとって一番大切なのは……、私有財産の保全ってことにしたら？」と答えている（『春期限定いちごタルト事件』p.190）。あえて「小市民」に「プチ・ブル」とルビを振ることによってその意味をすり替え、自身の復讐衝動を正当化しようとするのである。
- 13 『友だち地獄：「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房、2008、p.43
- 14 『^{スケール}教室内カースト』（光文社、2012）参照。
- 15 『文學界』15巻1号（文藝春秋新社、1961.1）初出。『性的人間』（新潮社、1963）収録。
- 16 『感情化する社会』太田出版、2016、p.100
- 17 注16に同じ。pp.101-103参照。
- 18 以上3箇所は全て『夏期限定トロピカルパフェ事件』p.140より引用。
- 19 『秋期限定栗きんとん事件 上』創元推理文庫、2009、p.47
- 20 同上。p.28
- 21 『秋期限定栗きんとん事件 下』創元推理文庫、2009、p.139
- 22 『ユリイカ』39巻4号通巻533号、青土社、2007.4、p.100
- 23 注21に同じ。p.212
- 24 同上。p.229